



左から山本博文さん、森本宗利さん、土屋洋一さん

と話すのは氏子総代の緒方保則さん(73)です。「氏子は60人ほどですが、地域の約700人の人々たちから寄付をいただきました」と、前総代の菅野義昭さん(79)が感謝の思いを伝えます。

「近くにある『天満宮』も被災しましたが、熊本工業高校の生徒さんたちが再建に尽力してくれました。本当にありがたかった」と文化財保護委員の竹本紀彦さん(80)もうれしそうに口をそろえます。

辛い時にこそ、寄り添える心と心。この二つの神社の再建には、多くの人たちの温かい思いが注がれています。



「ガラッパ」の足の部分は縄編みます

夏の風物詩 ガラッパ

秋津川の南側に広がる青田。水田に水を送る用水元のすぐ近くに祭られているのが「水神さん」です。この地域では毎年、土用の丑の日に「川祭り」が行われます。カップパを水神さんとして祭り、人々の災厄を防ぐという、昔から伝わる祭りです。

祭りのお供え物が「ガラッパ」と呼ばれる、ワラで編んだユニークな飾りで、タコを逆さまにしたような形をしています。つとの中に、ナスやキュウリなどの野菜を忍ばせて笹竹に吊し、タカンポ(竹筒)に入れたお神酒と一緒に供えます。

ガラッパを作っている現場にお邪魔しました。「前年に収穫し保存しておいた稲のワラで、ガラッパを



毎年、役員の手によって「ガラッパ」が製作されます

編みます。地区の役員が交代で担います」と、ガラッパの足部分の縄編みに奮闘していた山本博文さん(58)。その横では森本宗利さん(69)が、木槌でワラを打って軟らかくする作業に取り組んでいました。

「ガラッパは水神さんと広崎の橋のたもとに飾られます。川遊びをする子どもたちが水難に遭わないためのお守りでもあり、この地域の夏の風物詩です」と1町内区長の土屋洋一さん(73)が教えてくれました。



ワラで編んだ「ガラッパ」の中に野菜を入れて供えます

散歩の終わりに

日差しが和らぐ夏の夕刻。秋津川の土手では、散歩をする人たちの姿が見られます。渡る川風は気持ちよく、西の空が夕日に染まる頃、家々からは夕げの支度のおいしい匂いが流れてきます。

あちらこちらと歩きながら、ここに暮らす人たちの、地域を愛する温かい思いに触れました。出会った人たちの、優しい笑顔が巡ります。

今日の日に感謝です。

